

マイナス100からのスタート

山村学園高校は、小江戸、と呼ばれる埼玉県川越市にある伝統校。長年にわたり女子校として歴史を重ねてきたが、平成20年より共学校として新たなスタートを切った。部活動は女子バスケットボール部をはじめとして、硬式テニス部や硬式野球部、バトン部、ダンス部等が全国大会で活躍。そんななか、剣道部はこれまで大きな実績を残すまでには至っていないが、平成27年に国士館大学剣道部でコーチを務めていた金野裕二氏が同校に赴任すると、徐々に活躍の場を全国へと近づけていった。

「国士館大学のコーチとして全国優勝を経験させてもらい、自分のなかにゼロからチームをつくってみたいという気持ちが芽生えました。そんなときに山村学園が体育の非常勤講師を募集しているのを知り、チャレンジしてみようと思いました」

実質、剣道部を率いはじめたのは2年目から。前任の顧問が退いたのをきっかけに、正採用となり監督に就任した。金野監督は就任当初の部の様子をこう振り返る。

「ゼロからと考えてはいましたけど、実際のところはマイナス100くらいのスタートでした。前任の先生を慕っていた部員たちと折り合いがつかず、部活動の体裁を整えるだけで精一杯。全国を目指すなんて、とても言える状況ではありませんでした」

状況は金野監督が当初思い描いていたものとはかけ離れていた。しかし、そんななかでも数いだっただのは、新入生が真面目に剣道に取り組んでくれたことだ。男子だけを見れば、5人中4人が中学校で剣道をはじめた選手た

ち。「メチャクチャ弱かった」と金野監督は苦笑いをするが、彼らの真面目さが、その後

の山村学園高校剣道部の土台となっていた。金野監督は部員たちを連れて、よく剣道の試合を見にいったそうだ。その目的は、剣道の視野を広げることだと言う。全国区の強豪校とは違い、部員のほとんどは学校から自転車通える地元の子どもたち。まずは目指すべき目標を示してあげることが大事だと考えた。練習試合にも積極的に参加し、少しずつ自分たちが進む道を部員たちに理解させていった。

その甲斐もあって、監督初年度の部員たちは現役最後のインターハイ予選でベスト16まで勝ち上がった。それまでチームを組むことさえもままならなかった状況だったことを考えれば、一気の大躍進と言っていいだろう。「シード校を相手に代表戦で勝利して、ベスト32まで進むことができました。今までで一番うれしかった瞬間かもしれません。何人かは大学でも剣道が続けてくれていますし、彼らには本当に感謝しています」

剣道部史上初となる
全国への切符を奪取

厳しい稽古と遠征を繰り返して、監督就任から5年目が経った昨年、はじめて関東大会出場を叶えた。監督2年目で勧誘が奮わず、男子が2名しか入部しなかったのを反省して、防具を担いで中学校まわりをしたときに出会った子供たちが結果を出してくれた。

学校で恒例となっている夏休み期間の部活動体験も、最初は一ケタの参加者しかいなかったものが、今では90人近い応募があるそうだ。山村学園が剣道の強豪校として認知されてきた現われとも言えよう。今では男女合わ

山村学園

(埼玉)

所在地…埼玉県川越市田町16-2
創立…1922年
部員数…男子34名・女子9名

「野心」は叶えられる

せて40名以上の部員を抱え、全国大会出場を目標に日々厳しい稽古に取り組んでいる。

そして今年の1月下旬、新チームで臨んだ高校選抜の埼玉県予選で同校は2位入賞。はじめて全国大会への切符をつかみ取った。

「初年度の子たちも剣道に対して真面目でしたが、今回全国選抜出場を決めてくれたメンバーは、それにも増して剣道に対する姿勢が素晴らしいと思います」

と金野監督は言う。部活動の時間が終わっても自主練習に勤しみ、まったく家路につく気配がない。金野監督がわざとどなって帰らせたいことも多々あった。そんな彼らだからこそ、必ず全国大会へ連れて行ってあげたいと、金野監督の指導にも自然と熱が入った。

11月に行なわれた新人戦以降は、金野監督の母校である東海大相模や想意にしている愛知県岡崎城西が行なっている錬成会に参加して、全国レベルの選手と剣を交えた。年始に開催された「茨城新聞社旗大会」では、結



男女合わせて40名以上の部員が、全国大会出場を目指して稽古に動んでいる